



(昭和36年生)

5 回 目 の 年 男

北区・上町支部
(今給黎総合病院) 小倉 芳人



10月中旬、一通の手紙を市医師会よりいただきました。内容は、来年の干支は“丑”で年男の感想をお願いしますとのものでした。考えてみれば来年60歳、5回目の年男すなわち還暦でもありました。何人もの先生の還暦のお祝いには参加してきたのですが、自分にとってはまだ先のことと置いていたため、“還暦だ・年男だ”との認識をすっかり忘れており、“えっ自分が”と思わずつぶやいてしまいました。還暦というと、えらい先生方の節目のお祝いという感覚しかなく、いつまでも若い気持ちでいる自分や、落ち着きのない生活をしている自分からは想像できなかったのです。これは、ひとつに外科を取り巻く環境の変化にあると思います。以前は、還暦のころには開業するなり、管理職に就くなり安定している姿があったと思います。自分の努力が足りなかったことがすべてなのですが、定年まで医局ローテーションのお世話になるなどあまり考えていませんでした。しかし現実とはいうと、外科の同期生が3人ほど今なおローテーションのお世話になっており、50代での転職も当たり前で、ローテーションでの定年も現実味を帯びている状況です。

ただ、ふっと60歳というのを考えたときに先を見るのも後ろ見るのも面白い年代だと今

は考えて楽しんでます。先の30年を見ると自分の親の立場を見るような気がしますし、後ろの30年のことを考えるとちょうど子供たちが今向き合っていることに近かった気がします。先の30年後と言えれば仮に生きていたら90歳です。おそらく自分一人では生活できず子供たちの助けを借りて生活していることと思います。考えてみれば昨年1月父の最期を見させてもらいました。満95歳でした。自分の家で最期を迎えたいとの希望はかなえてあげられず、長く病院での一人の時間を過ごさせてしまいましたが、子供たちと一緒に最期を看取ることができ最低限の約束は果たしたのではないかと感じております。反対に後ろの30年と言え、30歳の時でちょうど結婚して一人目の子供ができた年でした。それからの30年は子供中心の生活だったと思います。今は二人の子供はともに自立し実家からは出ていきましたが、時々顔を出してくれることがうれしくて仕方ありません。きっと自分の両親もそうだったのかもしれない。ただ自分は、仕事の忙しさやめんどろくささであまり実家へ顔を出すことはなく、今になって申し訳なかったなと思うところです。

今年を代表することとすれば間違いなく“コロナ感染症”だと思います。このコロナ感染症により医療体制も生活様式も大きく変わってしまいました。医療に関しては、7月に緊急手術をした患者様がコロナ感染症と判明しいろいろな部署のお世話となりました。患者様に関しては肺炎を併発しており鹿児島大学への転院と決まりました。その搬送時、迎えに来ていただいた集中治療部の先生方や救急隊員はすべて完全防備の体制で、映画の

ワンシーンと思われるような今まで経験したことない物々しさでした。幸いにも鹿児島大学病院での治療のおかげで救命でき、お世話になった集中治療部の先生方・消化器外科の先生方にこの場を借りてお礼申し上げます。ただこのあと、コロナ感染症に関しては患者様だけでなく、医療従事者まで影響してくることを強く感じました。麻酔導入に関係した麻酔科医や看護師は2週間の出勤停止となり、手術に担当した外科医もPCR検査で2回陰性が確認できるまで約1週間自宅待機あるいは宿舍待機となりました。自分は家族と同居していた関係で病院宿舎に待機することとしました。病院からは宿舎の扉前に温かい食事を1日3食届けていただき、家族からは食べ物や本などを差し入れてもらい、大変うれしかったです。皆様の好意はありがたかったのですが、本音でいうとストレスのたまる毎日でした。とにかく、“部屋から出たい”それだけでした。歳を取っている自分でさえそのような状況ですので、若い人たちのストレスはさらに強いことと思います。テレビ報道でコロナ陽性者が隔離施設から脱走するとの報道もありました。決していいことではありませんが、その気持ちも少しわかるような気がしました。また、生活様式に関しては、コロナ禍でみんなでの会食や飲み会もできず、旅行にも行けず状況が一変してしまいました。今年は多くの学会がWeb参加やハイブリッド形式となりました。インターネットに強い人にとってはいいかもしれませんが、アナログに生きてきた自分にとってはなかなかなじみずにあります。さらに、多くの研究会もWeb形式となり医局の先生方とも話をする事もなくなくなりました。研究会では講演内容以上に、その後のいろいろな先生方との情報交換が楽しかった自分にとっては何か物足りなさや寂しさを感じています。また、旧第一外科の同期生の集まりとして“いっき会”なるものを毎年開

催しておりましたが、今年はコロナ禍で自然消失してしまいました。いっき会は島津久明教授の入局“一期”生だったことより単純に“いっき会”と命名したのでした。いっき会も30年以上続けており、最近では還暦を迎えた人には傘を贈ることになっていました。今年は残念ながら頂くことができませんでしたが、コロナ禍が落ち着いた時には素敵な傘をいただけるのではと楽しみにしております。

仕事に関しては、現在ローテーションで今給黎総合病院に勤務させていただいています。ちょうど病院移転の時期にかかり、この会報が届くころは新病院（いまきいれ総合病院）へ移転していることと思います。この年になっても新しい病院ができていく姿はワクワクしてきますし、移転作業は大変ですが貴重な経験をさせていただいています。少し新病院の宣伝になりますが、入って最初の受付の電車通り側は全面ガラス張り開放感がありますし、手術室も今まで自分が勤務してきた病院の中で最も広く使いやすそうなスペースとなっています。中でも一番広い手術室にはダ・ヴィンチも導入され、泌尿器科を中心に手術の準備をしております。病棟も明るく広い病室となっており、患者様も快適に療養していただけるのではないかと楽しみにしております。新病院は交通の便のいい場所となり、天文館や中央駅も近くなります。若い先生方が大いに活躍してくださる病院となってもらえればと思います。

少し寂しい話になりますが、自分自身に関しては最近体や頭の衰えを感じます。体は少し使うと翌日や翌々日にはその部分が痛くてしょうがなかったり、低い段差でもすぐにつまずいてしまうなど、きりがありません。また、1年前には右の鼠径部が少し膨れてきました。鼠径ヘルニアで、手術をしてもらいました。鼠径ヘルニアの説明をするときには、この病気は生まれてすぐか歳を取ってからの

[新春随筆]

病気ですよと説明してきたのですが、自分自身がすでに歳を取っていたようです。また、頭に関しては物や人の名前が出にくくなりました。あれそれは出るのですが、その先の名前が出てこない、ただ面白いもので同じようにあれそれと言って通じる人（家内のことです）が近くにいてくれることで助けられています。今は、そういう衰えに反発するのではなく、変化を受け入れた生活様式をしていきたいと思っています。“少しゆっくりと、ゆとりを持って”を目標に次の12年を過ごしていきたいと思っています。そして、次の年男の投稿をする機会があったら、“コロナ禍も落ち着いてよか時代だね”と言えることを祈っております。